説教20200726フィリピ2：12-18　　68 121 Ⅱ156

「喜びなさい」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　パウロはフィリピの信徒たちへの手紙の中で喜びという言葉を19回も使って、喜びについて語りました。今日の聖書箇所はその中でも最も喜びの核心をついた箇所だと思います。さて先週私たちは、同じ喜びで満たされるということを知らされました。牢獄に居ようが、フィリピの町に居ようが、**同じ変わることのない喜び**で満たされれば、私たちは喜び合うことが出来ます。又、時代が代わろうと、昔の人と時間の隔てを突き破って、私たちは同じ変わることのない喜びで喜び合うことが出来るのです。そしてその同じ変わることのない喜びに満たされるには、私たちは、常に人間キリストと共に歩んでいることが必要です。死に至る迄、父なる神に従順であった人間キリストは、御前にひざまずく私たちを一つの同じ喜びで満たしてくれるのです。

　今日の聖書箇所の最後でパウロは「喜びなさい。私と一緒に喜びなさい」と言って、未来に向かって高らかにその喜びを私たちに勧告しています。これは神からの命令です。旧約聖書によく、聖なる日に泣いていてはいけない、喜びなさいといったことが記されていますが、そのような律法の命令は、パウロのうちに血肉化していましたので、この聖書箇所の「喜びなさい」という勧告は、律法の命令を汲んでいると思われます。

　しかし、「喜びなさい」という命令はあまり私たちの日常生活においては聞こえてこない言い回しではないでしょうか。しかし、いかに神様からの命令であるとはいえ、この「喜びなさい」というのが、まことにどういうことなのか、が分からないと、この命令が私たちの心の中にストンと落ちて来るということはありえないでしょう。もしくは、分かったように思っていると、誤解をしてしまうかも知れません。

　この「喜びなさい」という言い回しは、文語訳聖書では「喜べ」となっておりました。喜べという方が、素直で良いかもしれません。「喜べ、我と共に喜べ」、いいですね。或いは関西弁を用いて「喜びやー、我と一緒に喜びやー」というのもいいかも知れません。

　喜びの中身というのは非常に大事です。今の時代、人々はいわば「見せつける」喜びにはまっています。自分が喜んでいる姿を、インターネットなどを用いて外に発信して、みんなに見てもらい、そして、いいねをもらえることを期待して、いいねの数が増し加えられることを又喜ぶ。しかしこの種の喜びは将に朝の霧のすぐに消えうせる露のようです。自分の喜びを、外部に依存しているうえに、今の喜びがたちまち過去のものとなってしまうので、次から次へ新しい喜びの姿を発信しなければなりません。

ではパウロの時代はどうだったかといいますと、ローマの人々は「見る」喜びに浸っていました。ローマの国家や有力者が、ローマ市民を取り込むために「パンとサーカス」を提供したのは有名ですが、そのような受身の喜びに人々は浸らされていたのでした。実はパウロ自身もローマ市民でありましたので、彼自身も、サーカスを見る喜びを知らなかったわけではないと思われます。

さてこういった類の「見せつける」喜び、「見る」喜びは、今を生きる私たちの実に身近にある喜びであり、この地上を歩んでいる限り、誰一人としてこの類の喜びから無縁ではありえません。多かれ少なかれ私たちはこの類の喜びを喜んでいるのです。ですから、そのことが前提となって、私たちが今日の聖書箇所の「喜びなさい」という勧告を聞くとき、どうしてもこういった類の喜びを思い起こしてしまうのです。しかし、パウロがここで「喜びなさい」といって私たちに勧告しているのは、決して、こういった類の喜びではなくて、わたしたちが、先週から聞いてきた、「同じ変わることのない喜び」のほうなのです。私たちは、この両者を心して区分しなけれななりません。

　では更に、パウロが私たちに「喜びなさい」「喜べ」「喜びやー」といって勧告している喜びの中身を掘り下げてまいりたいと思います。

パウロの頭の中にあった喜びなさいという律法の命令は、申命記１２章などに記されていますので少し引用したいと思います。

申命記 12章 11節から「あなたたちの神、主がその名を置くために選ばれる場所に、わたしの命じるすべてのもの、すなわち焼き尽くす献げ物、いけにえ、十分の一の献げ物、収穫物の献納物、および主に対して誓いを立てたすべての最良の満願の献げ物を携えて行き、

あなたたちの神、主の御前で、**息子、娘、男女の奴隷、町の中に住むレビ人と共に**、喜び祝いなさい。**レビ人には嗣業の割り当てがないからである**。」

　12章18節から「ただ、あなたの神、主の御前で、あなたの神、主の選ばれる場所で、**息子、娘、男女の奴隷、町の中に住むレビ人**と共に食べ、主の御前であなたの手の働きすべてを喜び祝いなさい。**あなたは、地上に生きている限り、レビ人を見捨てることがないように注意しなさい。**」

　この2か所には確かに喜び祝いなさい、という神からの命令が含まれています。そして興味深いことに、主なる神はレビ人を深く憐れんでいるということです。ここでもこれを読む私たちの先入観が邪魔をしがちですが、レビ人は、後に律法学者やファリサイ派となって、世の人々を指導し取り締まった偉そうな存在としてではなく、むしろ、他の部族には与えられている「嗣業」の地、つまり自分の町が与えられていない、**憐れな存在**として捉えられています。主なる神のレビ人をはじめ私たち人間に対するまなざしは深い憐れみに満ちています。主なる神は、息子、娘、男女の奴隷、町の中に住むレビ人といった**恵まれない**人々とともに、あなたがたは喜び祝いなさいと言われているかのようです。ここには、私たち人間が、それぞれ欠けのある憐れな存在であることを認め合ったうえで、だからこそ、お互いに喜びあうのですよ、という主なる神の**憐れみの勧告**があるのです。

　しかしいつしか私たち人間はその最初の神の憐れみから離れて、レビ人は律法学者やファリサイ派になり、私たちは、「見る」喜びや「見せつける」喜びの方を喜ぶものとなってしまいました。

　パウロは今日の聖書箇所で私たちに「喜びなさい」といって、実は、この最初の神の憐れみの勧告を繰り返しているのだと思われます。

　もっとも恵まれない存在に目を留めて、彼らと共に喜び合う、ということは先週聞きました、同じ変わることのない喜びに私たちが満たされるということと同じです。そこには恵まれない存在に対する深い憐れみの念が篭められます。主なる神の憐れみの勧告に従うことによって、私たちは弱者に対して目を留め、それを喜ばせることが出来る存在へと変えられます。そしていつしか私たちは同じ変わることのない喜びで満たされていることでしょう。

　このように見ていきますと、同じ変わることのない喜びと、見る喜び見せつける喜びとは全然違うものだなあと思わされます。この両者は対極にあるといってもいいかもしれません。今日の聖書箇所でパウロは、達成とか、自分が走ったことが無駄ではなかった、というように、かなり力が入った表現をしていますが、そこには、まことの同じ変わることのない喜びの方へ何とか進んで行きたいという葛藤が現れているように思います。

同じ変わることのない喜び、とは何でしょうか。この事については先週も、本日の冒頭にもお話しましたが、なんだか聞けば聞くほどぼんやりしてきてはっきりしなくて、歯がゆい感じがあるのではないでしょうか。しかしそれはそれでよいと思います。なぜなら私たちが満たされるべき同じ変わることのない喜びとは、見る喜び、見せつける喜び、とは対極にある喜び、すなわちいわば**見えない喜び**であるからです。言葉を換えて言えば、それは「ぱっとしない」喜びです。

ぱっとしないという形容詞は、否定的にしか使われませんが、よく考えてみればぱっとしないということは重要かも知れません。パットすることばかりを追い求めて人生を歩んでいる人はパットできなくなったら、何もできなくなります。しかしぱっとしない喜びが身についている人は、もともとパットして喜ぼうという気がないので、どんな境遇でも満ち足りていることが出来ます。

　パウロ自身も、自分がぱっとしない人物であると見られていることを認めています。有名な聖書箇所ですがコリントの信徒への手紙２　１０章１０節「私のことを、手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱弱しいひとで、話もつまらない」とパウロは言われていました。この後、パウロは有名な「誇るものは主を誇れ」という聖句を持ちだして、自分を誇る者たちを戒めていますが、自分を誇る人ほど、人のことを弱弱しいとか思ったりするのではないでしょうか。

今日の聖書箇所を読んで、「喜びなさい。私と一緒に喜びなさい」などど聞かされると、パウロという人は何と偉い方なんだろうと思いがちですが、実は、それは私たちがそれぞれに持つ自分を誇る心にからめとられているにすぎないのです。

パウロには自分を誇る意図は一切ありません。そこのところを私たちが勝手に先入観で思い違いすることは避けなけらばなりません。

そして、いよいよ、わたしパウロとあなた方とが、地上での歩みから引き離されることをも念頭において、将来のことを語っていくのです。**私がいない今は、なおさらあなた方は神に従順でいて畏れおののけ**とパウロは勧告します。そして先週に引き続き神と共に働き歩むべきことを語ります。

よこしまな曲がった時代の中では、私たちは不平や理屈を言わずにはいられないかも知れません。今日のテーマに即して言えば、私たちは日々、見る喜びや見せつける喜びからの誘惑にさらされておりますので、時に、ぱっとしない喜びのうちにとどまっていることに不平をかこちたくもなるかも知れません。ぱっとしない喜びのうちにとどまり続けるのには様々な妨害もあるでしょう。というのは彼の周りにいる人々にとっては、そのような喜びは不可解で、怪訝なものでしかなくて、あわよくば亡き者にしてしまおうと思わないとも限らないからです。しかし実は、こちらの喜びこそ、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つのです。つまりぱっとしない喜びは、ぱっと終わらず、永遠に続くからです。キリストの日には、私たちはこのように自分が走ったことが無駄ではなかった、労苦したことが無駄ではなかったと誇ることが出来るでしょう。パウロは、たとえ自分の血が注がれるとしても、と言って、この地上から離れ去る自分を認識しつつ、尚も、私が同じ変わることのない喜びに満たされることを確信しています。そしてあなた方にも、その同じ喜びを持ち、共に喜ぶことを勧告しているのです。

お祈りいたします

天に居ます私たちの父なる神よ、この主日に私たち兄弟姉妹を御前に集め共にあなたを賛美礼拝できます幸いに感謝いたします。

先週は、伝道師の准允式就任式にあたり、日下部教区長はじめ多くの教会の兄弟姉妹のお祈りとお証しをいただき、感謝いたします。

しかし、今多くの教会、殊に日本では東京の諸教会が新型コロナウィルスの脅威にさらされ、わたしたちが集うことが困難にされています。どうか主よそのような状況を顧みて、わたしたちを憐れんでください。私たちがあなたからの憐れみの勧告に従って、どんな時でもどこに置かれようとも、共に喜び会うことが出来る者へとなさしめてください。

今、病床に置かれ、病と闘っておられる方々を覚えます。どうか、私たちが、今の世における様々な壁を乗り越えて、同じ変わることのない喜びに満たされますように。そのために私たちが祈り働くことが出来ますように力をお与えください。

父と聖霊と共によよ生き支配しておられます私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈ります。